

今月の谷口雅春先生のお言葉

日本人が大切にしてきた「大和」の心

神話にも現れている日本の精神

先ず『古事記』の冒頭をみます時に、「天地の初発の時、高天原に成りませる神の御名は天之御中主神」と、こう書かれているのであります。其処に日本民族の個性ある表現がなされているのです。日本民族は、生れて仰いで天を見、伏して地を見て、そうして天地が「一」であることを直観したのであります。「一」という字を日本では「はじめ」と読みますが、天地は二つに分かれているけれども、本来「一」であるということ

見たことがその叙述の初めにちゃんと現れておるのであります。

日本民族は総てバラバラに分かれているものを一つに総合するところの天分を持っているのでありまして、日本の国の名前を「大和」と名づけられたということも、「や」というのは「弥々」と云う字が当てはまるので、いよいよ多いという意味であります。「ま」というのは「纏める」という意味であります。弓で射る「的」を「ま」というのも、同じことでありまして、中心に「纏まって」いる姿を現わしています。いろいろに分かれていても、その悉くが一つに纏まるべきも

のであって、決してバラバラのものは存在しない、宇宙は一つである。世界は一つであるというところのその人生観が、古代の日本民族を通して現在の日本民族に至るまでずっと貫き通しているところの民族的信念とでもいうべきものなのであります。

(新版『真理』第3巻240～241頁)

すべてのものを一つに包みこむ

おのおの、何々民族としての個性を有ちながらみんな一家族たる「人類」なる理念が天降って来ているのでありますから、みんな互に兄弟なのであります。兄弟がおのおの個性をもちながら同じ生命のつながりであるように人類はみな互に兄弟であります。日本民族は、人類互に相和そうと云う理想をもって、国をはじめたのであります。そして、「大和」の国号がそれを示しているのであります。これが日本建国の精神なのであります。「形は心をあらわす」と云う諺がありますが、日本人の発明した

風呂敷を見ればわかります。風呂敷はどんな形のもので、その形を毀さずに一緒に包んでしまうことが出来るのであります。他の国を毀して併呑するのは霸道であって、日本の皇道ではありません。日本の精神は風呂敷精神であります。総ての物を毀すことなく一つに包んで「人類」と兄弟となり一家族となるのを建国の理想としているのが日本民族であります。

(新版『真理』第3巻232頁)

日本精神とは「愛」のこころ

「人類は互に一つだ」と云う大和の精神が、日本精神でありますから、日本の建国の理想は「愛」だと云うことが出来るのです。「愛」と云うのは、どの人種も、元は一つと云う自己一体の自覚であります。自分と他とは形の上では別々であっても、生命は一体だと云う自覚です。「私はあの人を愛する」と云うことは、あの人と私とは本来一つである。そこで彼の喜びを私の喜びとし、

彼の悲しみを私の悲しみと感ずる、これが「愛」であります。それは、或は男女の恋愛のようにも現われ、或は父母親子の愛と云うような関係にも現われ、或は家族が一体であると言ふ感じの家族愛と云うものになって現われ、或は国を愛する愛国心ともあらわれ、或は人類を愛する人類愛ともなつて、あらわれます。吾々はこれらの色々の愛を、その内の一つでなく、みなことごとく調和した相で愛し得るように努力するとき、偏った人間ではなく「全人」としての完全な人間の魂がみがかれるのであります。

(新版『真理』第3巻233頁)

日本人としての生甲斐が感じられるには

愛国心の昂揚などと言っても、愛し得る値打のある国というものがあれば愛するけれども、愛し得る国としての資格があるかないかわからん現状のような日本国では愛することができないというのは、それは国というものを、唯、単に形にあらわれている現状の国——即ち現象

の国家——だけを日本国だと思つているために、こんなに強盗や、強姦や、失業者や、ストライキや、戦争や、つまらないことばかり充満している此のような国家は、愛することはできないということになるのでありますけれども、その現実の奥に「理念の日本の国」なるところの、目に見えざる「国の本体」なるものをみたならば、其処に希望が生まれ、其の国に生きていくことに、生甲斐を感じ、其の国を愛することができるようになります。外面の現象は如何にもあれ、それを内在の理念——理想に近づけて行くところに希望が持て、勇気が出、生甲斐が感じられて来るのであります。此の肉眼には見えないけれども、既に在るところの日本をつくり出した「完全模型」即ち「実相」というものを、智慧に依つて直観して、それを見出し、そうした完全模型(理念)に向つて、国を推し進めつつある日本国民が自分だ、という自覚が出て来たときのみ、本当に日本人としての生甲斐が感じられてくるのであります。

(新版『真理』第7巻272～273頁)